



UTCMES ニュースレター

VOL.1 2012

冒頭言

山内 昌之 1

公開講演会報告記

「中東大変動の構造と力学——世界史から見た「アラブの春」」
 藤波 伸嘉 3

シンポジウム・セミナー報告記(1)

「アッザーム・タミーミ先生講演会」
 鈴木 啓之 4

シンポジウム・セミナー報告記(2)

「湾岸と日本——学術交流の意義」(招待講演) 及び
 国際シンポジウム「アラブ首長国連邦と日本とのエネルギー
 分野における学術交流の架け橋」
 森 まり子 6

エッセイ

「英国の湾岸研究と「アラブの春」」
 山田 真樹夫 9

新刊紹介

藤波 伸嘉 11

中東地域研究センターの活動から 13

来客の紹介 15

来年度の活動予定 16

冒頭言

骸骨の初心とは——東大駒場を去るにあたって

山内昌之

東京大学大学院総合文化研究科教授・中東地域研究センター長

3月3日(土)にまもなく退職する私の記念講演が最終講義の意味合いをこめて900番教室(講堂)で開かれた。演題は、「中東大変動の構造と力学——世界史のなかの「アラブの春」というものである。ここで、退職記念の講演を企画され支援して下さった研究科長の長谷川寿一教授はじめ古矢旬グローバル地域研究機構長ならびに中東地域研究センターと読売寄附講座の皆さんに深く御礼申し上げたい。

とくに30年ほど前に、私を採用して下さった駒場の諸先生や諸先輩には感謝の言葉もなく、或る方々はすでに鬼籍に入られたが、その姿は仕草や言葉とともに今でもありありと感謝の念をもって思い起こされる。春には

美しい色をつけたツツジの傍らを行き交った同僚や事務員の方々と歩きながら打ち合わせをし、秋にははさながら印象派の絵画に現れるように紅葉の鮮やかなイチヨウ並木の下でいつも出会った助教や院生や学生たちと質疑や討論を重ねたことも楽しい思い出である。こうした方々の励ましや支援がなければ私の駒場30年の生活はなかったにちがいない。そして、読売新聞寄附講座やセンターの設立に参画したのは、私の駒場生活の掉尾を飾る思い出となることだろう。

率直に告白すれば、私のこれまでの研究生活も平坦ではなかった。子どもの時分から嗜好として日本や中国の古典や歴史にこだわる喜びと同時に、

感性として社会科学的な問題関心に大きく引きつけられる内面からの磁力を自然に感じるが多かった。一個の人格とその内面が異なるベクトルで引き裂かれる思いをしたことも多かったのである。自分なりの社会的理想や使命感へのこだわりは、研究における叙述や歴史の実証の要素と、政治的分析や理論の要素をいかに両立させるのかを絶えず自問させることになった。職業として歴史を選んだ私にとって、専門家として日本という国、国民や社会のために役立ちたいという学生時代からの夢や希望は、学問や教育の方法と社会貢献のあり方、政策批判や政策提言などの是非と関連して、時に自分の内面的な葛藤の大きな部分を占めたからだ。

もちろん私は職業的歴史家として、愛国心の赴くあまり歴史的事実を歪めがちな人びとは異質だという自負がある。私は、スペイン史でムスリム支

配に抵抗した英雄エル・シド像を史実から離れてつくりあげたメネンデス・ビダールの道を歩むはずもなく、オスマン帝国から独立したギリシャ王国への愛国心から、古代から近代までギリシャ民族が途切れることなく存在し続けたと誤って主張したコンスタンティノス・パパリゴプロスの歴史観に与するような立場ではありえない。

私が強調したいのは、学術研究と社会貢献との緊張をはらんだ関係にあるのだ。「学問には国境がない。しかし学者には祖国がある」と語ったのはフランスの細菌学者ルイ・パストゥールであった。勿論、学術研究と社会貢献のあり方はすぐに答の出るものでなく、私にしても納得できる答えを得られないまま今日に及んだといってよい。この点で、さらなる国際化を目指す21世紀の東京大学が、パストゥールの発言をどのように真摯に受け止めるのかを外から私は関心をもって眺めることになるだろう。

「骸骨を乞う」という言葉を知っている人も多いだろう。司馬遷『史記』の項羽本紀にある表現である。官職にある間は主君に捧げていた自分の体を、辞職するので返してほしいと引退を乞い願う意味にはかならない。この不思議な表現は、項羽の知恵袋の范増を失脚させようとした劉邦の謀臣・陳平の計略に項羽がはまった時の逸話なのだ。范増は自分の権限を奪った項羽に怒ってこう述べたといわれる。

「天下の事大いに定まる。君王自ら之れを為せ。願はくは骸骨を賜うて、卒伍に帰せんと」(天下の大勢は定まったも同然ですから、これからは王自らおやりなさい。私は骸骨を賜って庶人として民間にうずもれましょう)。これはなかなかワサビの効いた皮肉というほかない。いずれにせよ、「骸骨を乞う」

や「骸(むくろ)を乞う」には、老いた人間が余力を残して辞去する響きを感じられるのだ。

私も中国の流儀であれば「骸骨を乞う」時を迎えた。しかし、ここでは室町時代初期の能役者、世阿弥の言葉に励まされながら、「初心忘るべからず。時々の初心忘るべからず。老後の初心忘るべからず」という日本式の助言を受け止めたい。世阿弥は、二十四、二十五歳の頃の花こそ「初心」だという場合の「初心」だけでなく、「時々の初心」や「老後の初心」といつて年を経て長い目でものを見られる素直な心も強調したかったのだろうか。

また、『風姿花伝』にも、「年々去来花」としどしにさりきたるはな」という表現も見られる。狭い意味での初心とは二十四、二十五くらいの「初心の時分」や「時分の花」ということだろうが、三十四、三十五の盛り頃や五十歳、六十歳以上の「風体(ふうてい)」というものもあるだろう。おそらく老成して物事に慣れるにしたがって惰性に流されがちなので、世阿弥は「年々に去り来たる花」を忘れるなど念を押しただろうか。

世阿弥のいう「まことの花」は、たとえ年をとっても咲かせられる「花」という意味にも通じます。あたかも創造力や生産力のおちた学者へのエールともとれる「やさしさ」なのかもしれない。あえて言えば、「年々に去り来たる花」というのは、私のように骸骨を乞うべき世代の学者やその研究にも通じる心構えではないか、と励まされる思いもする。

幸い、東京大学駒場の退職後も、関係者のご好意で、明治大学特任教授・フジテレビ特任顧問・三菱商事顧問に就任させていただいたので、年来の学術テーマを研究し考え続ける機会があた

えられることになった。関係者の御高配に何よりも感謝しなくてはならない。そして、学問の「初心」にもう一度勇気をふりしぼって取り組みたい。そのテーマとして、年来の課題である『中東国際関係史』(岩波書店)を完成させねばならず、また前から依頼されている『現代史』(10巻 中央公論新社)の執筆にも挑戦したいと考えている。

人生も歴史の一コマである以上、四季の循環に支えられた農事のように時期の区分をもっている。春には種を蒔き、夏には苗が生長する。そして、秋には稲刈りし、冬には収穫物を貯蔵するのだ。吉田松陰は人間がどの年齢で死んでも、10歳でも、50歳でも相応の四季、四時があると遺書の『留魂録』に書き残している。30歳で物故した松陰のひそみにならうのは僭越のそしりを免れないが、64歳を越えた私にも相応の四季、四時がそれなりに備わっていたのかもしれない。しかし、私の60年の仕事の中味が果たして「しいな(殻ばかりで中味が無いもの)なのか、栗(ぞく)(ゆたかな穀物)なのか、私は知ることができない。

私の仕事の評価はあくまでも社会や他人の役目であり、私は黙ってそれに従うほかないと考えるからだ。私がいづも銘記しているのは、福沢諭吉に「瘦我慢の説」をつきつけられた時の勝海舟の心境なのである。「行蔵は我に存す、毀誉は他人の主張、我に与らず我に閑せずと存候」と。

公開講演会報告記

山内昌之「中東大変動の構造と力学——世界史から見た「アラブの春」」

日時：2012年3月3日(土) 15:00～17:00

会場：東京大学駒場キャンパス 900 番教室

報告：藤波伸嘉(東京大学大学院総合文化研究科特任助教)

2011年度の当センターの活動の締めくくりとして、センター長山内昌之教授による公開講演会が開催された。本講演会は2012年3月をもって東京大学を退任される同教授の最終講義に代わるものでもあり、講演に先立ち、長谷川壽一大学院総合文化研究科長による本センターの紹介、そして古矢旬グローバル地域研究機構長による真情の溢れる山内教授の紹介があった。この日は晴天にも恵まれ、900番教室を埋め尽くす500人前後の聴衆が詰めかけたが、その前で山内教授は、歴史学の方法論に基づき、前年の「アラブの春」とその構造とをいかに捉えるべきかという問題について報告を行なった。以下、簡単にではあるがその内容を報告することとしたい。



まずは、歴史家としての立場から、歴史学の方法論についての簡潔な議論が行なわれた。即ち、歴史上の事象を捉え分析するに当たり、「時間」という単位とその設定方法、出来事相互の「因果関係」、そしてそれが埋め込まれている政治や社会の「構造」、そしてそれを分析する際の基準点として活用されるべき「比較」の意義である。「時間」についてはフランスの歴史家ル・ゴフの著作、そして『春秋公羊伝』が引き合いに出され、歴史叙述において物事の起源や始原を設定することの意味が問われた。続く「因果関係」についての

議論からは、具体例としての「アラブの春」に即して論旨が展開する。ここではトゥキユディデスに依拠しつつ、歴史事象の要因を「世に伝えひろめられた原因」と「もっとも真なる原因」とに分類し、後者を探求することの必要性が指摘された。「アラブの春」に関して言えば、何事をもアメリカ帝国主義やシオニズムの所為とするような歴史理解が批判され、より本質的な「もっとも真なる原因」として、アラブ社会の経済的低成長や国内の抑圧的政治構造、そしてとりわけ中東諸地域における過剰な若年層人口に目を向けるべきとされた。

以上を前提に、「アラブの春」に至る構造変動の差し当たりの起点として山内教授が着目するのが、2003年のイラク戦争であった。この戦争を機に中東の地政学的構造は大きく変容し、それが昨年の出来事の直接の原因となったとされる。即ち、イラク戦争後に、アメリカ及びイスラエルと提携するエジプトやサウジアラビアなどの「アラブ穏健派」と、イラン及びシリアという「急進派同盟」との対立構造が登場したが、この二極間の権力バランスが大きく変化したことこそ、昨年の一連の出来事を生んだ構造変動として理解されるべきとされる。その変化とは、第一に、イラク撤兵によるアメリカの中東政策の求心力低下、第二に、アラブの民主化運動の国境を越えた広がり、そして第三に、イランの影響力の退潮とトルコの新外交の台頭であった。この構造変動の端緒を示す言説として、2009年におけるオバマ及びネタニヤフの演説、そしてイランの大統領選挙が分析の俎上に載せられた。そして更に、アラブ地域とイラン・トルコそれぞれにおける国家建設や国民統合の伝

統の相違に留意すべきことも示唆された。最後に、2012年初頭のイランの核開発及びホルムズ海峡封鎖問題が取り上げられ、この外交問題も、イラン国内の権力闘争との連関で把握されるべきという指摘がなされ、今後の中東情勢への展望が示された。

講演会を締めくくるに当たり、山内教授は30年にわたる自らの駒場での教育・研究活動についての回顧を行なった。日本や中国の古典文芸に惹かれる心と中東イスラーム地域の歴史家としての職責との間の緊張関係、国境を超える学問研究の本義と国家・社会に貢献したいという心との間の緊張関係の中にあつた心情が語られた。同時に、「愛国心」により歴史を曲げることの危うさについては、スペインやギリシアの事例を挙げて注意が喚起され、その間のバランスを取ることの重要性が改めて訴えられた。最後に山内教授は、30年間の駒場での活動に幕を引くに当たっての「骸骨を乞う(司馬遷『史記』項羽本紀)」という心境を披瀝する一方、世阿弥『風姿花伝』の「初心忘るべからず。時々の初心忘るべからず。老後の初心忘るべからず」という言葉を引いて、東大退任後の今現在の「初心」をもって、今後とも研究活動、そして社会貢献のための活動に取り組んでいく決意を示された。これに対し最後に司会が、陶淵明『歸去來辭』からの引用だという山内教授への送別の辞を述べたとのことである。

以上、歴史学の方法論に関する議論と、その適用対象としての「アラブの春」に代表される中東地域の構造変動の分析、そして一人の市民、一人の歴史家としての心情の吐露と、今回の催しは、駒場で30年にわたり教鞭を取り、多くの学生を指導されてきた山内教授による公開講演会として、誠に相応しいものであつたと思う。末筆ながら、山内先生の指導を受けた多くの研究者たちの末席に連なる者として、先生の今後の一層のご活躍を祈念して、拙い紹介の文を終えたいと思う。

シンポジウム・セミナー報告記 (1)

「アッザーム・タミーミ先生講演会」: The Hamas-Fatah Reconciliation and the Future of the Palestinian-Israeli Negotiations

日時: 2011年7月27日(水) 14:00 ~ 16:00

会場: 東京大学本郷キャンパス東洋文化研究所 3階大会議室

報告: 鈴木啓之 東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻修士2年(パレスチナ専攻)

アッザーム・タミーミ氏は、その代表的著書 *Hamas: Unwritten Chapters* などによって知られるハマース研究の第一人者であり、テレビ番組などへの出演により積極的に情報発信を行っている研究者である。以下では、「The Hamas-Fatah Reconciliation and the Future of the Palestinian-Israeli Negotiations」と題された氏の報告に関して、その内容を要約し、会場との質疑応答に関して言及した後に報告作成者による若干のコメントを述べる。

理的境界が明確に存在しない当該地域における国境の持つ恣意性に言及した。このなかで氏は、両国の国家建設プロジェクトからパレスチナのみが除外され、イスラエルが建国されていることに注意を喚起する。続いて2. では、1. で指摘したアラブ諸国家体制が根本的に誤りであったことが、今春以来の「アラブ革命」によって明らかになったとの分析が加えられた。この大きな政治的変動の背景には、経済的要因にも増して「尊厳の



タミーミ氏の報告は、1. アラブ諸国家体制に残る植民地システム、2. 「アラブ革命」の影響、3. 国連総会でのパレスチナ加盟承認を目指す試みを含む誤りの3点に要約される。

1. に関してタミーミ氏は、イギリスとフランスによる中東・北アフリカ地域のいびつな分断が現在のアラブ諸国家体制の始まりであると指摘し、地

域的欠如が存在する。そして、長年に亘りシオニスト体制によって尊厳を傷つけられてきたパレスチナこそ、「アラブ革命」によって最も恩恵を受ける人々となっているとの指摘がなされた。

最後に3. でタミーミ氏は、本年9月の国連総会での加盟承認を目指すパレスチナ暫定自治政府の動きを批判し、「アラブ革命」によって「国民国家」体

制の失敗が明るみに出た現在、このような動きは無意味であるとの見解を述べた。氏は、パレスチナ/イスラエル紛争に対する「二国家解決」に替わり、現在のイスラエルをも含めた広域な「アラブ連合国 United Arab States」による解決を提示している。

タミーミ氏の報告に対して会場からは、「アラブ革命」に関する質問、二国家解決案に替わって氏が提示した「アラブ連合国」構想に関する検討、さらに氏の専門であるハマースの動向に関する質問が投げかけられた。「アラブ革命」に関して氏は、「イデオロギーの消失」こそが新たな事態であり、より普遍的な「権利」や「夢」といったものが全面に押し出されているとの分析が述べられた。そして「アラブ連合国」構想に関しては、ヨーロッパ出身のユダヤ人も本人の意思に則って現地に残る権利を有すること、実現された場合は資源の豊富さによってアラブ地域全体の繁栄が想定されること、この実現に関しては人々の意志に大きく依拠するが、それに加えてエジプトの動向がこの構想の鍵となることに言及がなされた。氏の想定する「アラブ民族 Arab Nation」がウンマを基軸とすることも紹介され、大胆な構想に会場の関心が集まった。さらに、氏が専門とするハマースに関しては、5月に実現されたファタハとの和解合意が長くは持たないとの見解を現状分析として述べる一方で、ハマースの指導部が、ヨルダン川西岸地区・ガザ地区・歴史的パレスチナ域外における地域指導部、および3地域を包括する上級指導部という構造になっているとの基本情報についても丹念に説明が加えられた。



タミーミ氏は、ハマースの指導部と個人的に「親しい friendly」関係を持ち、これを研究における大きな強みとしている。氏の代表的著作 *Hamas: Unwritten Chapters* および *Hamas: A History from Within* は、Mishal and Sela [2006] や Hroub [2000]、Gunning [2008] などと並び、代表的なハマース研究の著作である。ハマースに関しては、その頑強なイメージとは別に「現実主義的」とあるとの評価が先行研究において加えられる。イスラエルとの「停戦(フドナ)」によって現実に対処する姿は、日本における研究でも度々紹介される(一例として小杉 [2006]、森 [2010] など)。

その一方で、タミーミ氏の「アラブ連合国」に関する提言は、アメリカ主導によって行われてきた「二国家解決」、そしてその代替案としてエドワード・サイドなどによって主張された「二民族一国家 bi-national state」のどちらにも属さない大胆なものである。限界を見せる現在のアラブ諸国家体制を解体し、イスラエルも含めた広域の連合国の創出によってパレスチナ/イスラエル紛争を解決へと導くとの提言は、非常に大胆でありながら実現性におい

て多くの疑問が会場から提示された。報告作成者による若干のコメントを付すならば、特にエジプトがイスラエルとの過去のあらゆる条約を順守することを確約している事実を考慮すれば、氏の構想がいささか現実離れしているように感じられた。さらに、現在のパレスチナ問題は、もはや周辺のアラブ諸国とイスラエル、またはパレスチナ暫定自治政府やパレスチナの諸組織とイスラエルという対立軸のみならず、トルコやイランといった周辺の実力国が強い存在感を示す多局型の対立軸を持つ問題に変化しつつある。特に2010年の「ガザ支援船団拿捕事件」(詳細は「パレスチナ学生基金」HPに掲載)以降、トルコは「当事者」としての関与を積極化しており、周辺アラブ諸国に限定されることなく、より包括的な和平への取り組みが求められていると言えるだろう。この点で、氏の「アラブ連合国」構想には留意が必要であると思われる。しかし、これは氏の現状分析に関して留保をつけるものではない。「アクティビストとして、そしてアカデミストとして」と自ら述べるように、綿密な現状分析と将来に対する大

胆な提言こそが、タミーミ氏の最大の魅力であると言えるであろう。

(参考文献)

小杉泰 [2006] 『現代イスラーム世界論』 名古屋大学出版会。

森まり子 [2010] 「ハマースの論理と対イスラエル和平——プラグマティズムへの変容 1987～2007——」 『中東研究』 第508号、中東調査会。

Gunning, Jeroen [2008] *Hamas in Politics: Democracy, Religion, Violence*. New York: Columbia University Press.

Hroub, Khaled [2000] *Hamas: Political Thought and Practice*. Washington, DC: Institute for Palestine Studies.

Mishal, Shaul and Avraham Sela [2006] *The Palestinian Hamas: Vision, Violence, and Coexistence*. New York: Columbia University Press.

Tamimi, Azzam [2007] *Hamas: Unwritten Chapters*. London: Hurst and Company.

—— [2011] *Hamas: A History from Within*. Massachusetts: Olive Branch Press.

シンポジウム・セミナー報告記 (2)

「湾岸と日本——学術交流の意義」(招待講演) 及び国際シンポジウム

「アラブ首長国連邦と日本とのエネルギー分野における学術交流の架け橋」

日時：2011年12月5日(月)

会場：東京大学本郷キャンパス浅野地区武田ホール

報告：森まり子 (東京大学総合文化研究科特任准教授)

12月5日、東京大学(本郷)の武田ホールにて東京大学大学院工学系研究科資源・エネルギー関連三センターなどの主催する国際シンポジウム「アラブ首長国連邦と日本とのエネルギー分野における学術交流の架け橋」が開かれ、東京大学中東地域研究センターが共催団体として参加した。このシンポジウムは、東大とアブダビ石油大学(PI: The Petroleum Institute)の将来的な提携の準備として開催され、双方の大学関係者と共に、アラブ首長国連邦と深い関わりを持つ日本の石油会社の関係者が多く参加した。北森武彦工学系研究科長が開会の辞で、4月に設立されたばかりの中東地域研究センターを好意的にご紹介下さり、共催団体として今回参加していることに言及して下さいしたのは大変ありがたいことであった。石油大学副学長・工学部長のユースフ・アブドゥルマジド教授の基調講演では、同大学の研究上の国際協力の体制や、WISE (Women In Science and Engineering) というプログラムにより女性の科学教育に力を入れている現状などが説明された。前者に関しては、様々な国籍の、特に若手研究者を採用している点が今の日本の大学にも増して国際化が進んでいる証として印象に残った。実際、昼食時にお話しした石油大学の研究者は出身がイギリス、イタリア、ギリシア、ブラジルと非常に多様でアラビア語よりも英語が学内の「公用語」とであると同い、大学の国際化について改めて考えさせられた。

招待講演として私が行った「湾岸と日本——学術交流の意義——」では、中東センターの設立の経緯、理念、学術交流の構想と意義などについて説明させて頂いた。講演後に石油大学の方々

や日本の石油関連企業の方々から頂いた感想や、後日メールで寄せられた質問などからすると、センターに大変関心を持って頂けたようで嬉しく思っている。石油大学の方々からは今後東大に留学生や研究者を送る場合にセンターともかかわりたい、石油会社の方々からは人材を現地に送る際に知識などの面で支援願いたいなどの要望を頂き、また工学部の先生方からは今後も機会があればセンターと提携したいなどの感想を頂いて有意義であった。貴重な機会を与えて下さった佐藤光三・資源フロンティアセンター長、松島潤・同センター准教授に御礼申し上げたい(以下は約30分の講演の抜粋である)。

「……私共の中東センターはオマーンの援助を受けております点で、UAE(アラブ首長国連邦)の石油大学(PI)と将来的な提携をめざすと伺っております東京大学資源・エネルギー関連三センターと共通する学術交流上の課題を持っておりますので、今日の講演ではケーススタディーの一つとしまして、私共のセンターの活動及び将来的な構想についてお話しさせて頂きたいと思

います。私共のセンターの設立の経緯からご説明させて頂きます。今年4月に、駒場キャンパスの東京大学大学院総合文化研究科・教養学部にて『スルタン・カブス・グローバル中東研究寄付講座』が、オマーンの寄付金によって設けられました。この講座は寄付金の利子によって運営されますために、恒久的に存続することになっております。この寄付講座の開設と同時に、駒場キャンパスには東京大学中東地域研究センター(UTCMES)が設立されまして、このセンターが(先ほどの)スルタン・カブ

ス講座を統括することになりました。従いまして、現在のところは中東センターとスルタン・カブス講座は同一のものになっておりますが、将来的にはオマーン以外にも寄付金を頂ける方面がありましたら、中東センターの傘下に同様の寄付講座が更に開設されることも考えられます。……

中東センターの学内での位置づけについてでございますが、駒場のグローバル地域研究機構を構成するセンターの一つとなっております。グローバル地域研究機構と申しますのは……駒場の地域研究のセクションを統合した機構でございまして、個々の地域の研究成果を他地域の研究成果と結び付けることによって、比較などを通じての世界的・普遍的なテーマの学際的研究を可能にすることをめざしております。例えば、現在『アラブの春』による中東の民主化の動きが注目されておりますが、この現象はインターネットの普及による世界的な情報革命やそれに伴う他地域の政治変動と強い結び付きをもって展開しております。駒場のグローバル地域研究機構は、例えば『民主化』というグローバルな現象について、地域ごとの専門家を有した七センターの連携によって、特殊性と普遍性——どこまでがある地域固有の現象でどこから先が普遍的な現象なのか——などを共同で明らかにすることを可能にいたします。このような巨視的な視点での研究を実現する豊かな可能性を秘めておりますグローバル地域研究機構は、次の七センターから構成されております。[七センター名及び運営方式の部分は省略]

さて、中東センターとスルタン・カブス講座は……急激な変化を遂げつつある21世紀の中東地域への理解を深め、学術・文化交流を通じて中東地域との友好関係を促進することをめざしております。具体的には、国際的な視野に立った質の高い中東研究の対外的発信や中東地域との学術交流を図っていく予定であります。また将来的には公平な視点で中東を理解し、この地域を政治的に不安定にしております紛

争の解決や平和構築に日本人として貢献できるような若い世代を育てることにより、第一線の研究を教育にも還元することをめざしていきたいと考えております。初年度は研究・教育基盤の整備に多くの時間を費やしておりますが、今後は国際シンポジウムやセミナーなどにおきまして、グローバル化と民主化、イスラーム的価値観と多元主義、日本の長期的な国益を見据えた対中東外交のあり方など、激動の中東情勢をめぐる切実な問題を内外の政治家・外交官・ジャーナリスト・学者をお招きしまして巨視的かつ長期的な視野から議論することを予定しております。また近い将来には、駒場のグローバル地域研究機構の傘下にある他のセンターや、学外の主要な学術機関とも連携して、駒場キャンパスの伝統である『学際的な魅力』にあふれた学術的企画を構想していきたいと思

います。初年度である今年は、秋に計画しておりました国際シンポジウムが諸般の事情で延期せざるを得なくなったのですけれども、その代わりとしまして夏前にパレスチナ人の政治学者を招いての講演会を学内の他の組織と共催で行いました。……また年末年始にかけて長谷川学部長が学部生2名・院生1名とオマーンを訪問する予定でございます。……来年3月には私自身ができればオマーンを訪問する方向で調整しつつありまして……高等教育省やスルタン・カブス大学を訪れ、その際に大学で講義なども行ってはどうかと、先日広尾のオマーン大使館に挨拶に伺いました折に大使よりお勧め頂いております。

来年度は月2回程度のペースで、中東関連の講演会・セミナーを駒場で開くことを計画中でございます。学内外の研究者のみならず、学生にも参加を促しまして、若い人々が将来研究者になるとならないとにかかわらず、自由に発言しつつ将来に向けて刺激を受けられる環境を提供したいと考えております。講演者は研究者を中心としつつ、外交官やジャーナリストなど学問以外の分野で活躍していらっしゃる方も想

定してありまして、『学問を象牙の塔にせず常に一般社会との現実的ななかかわりの中で自己検証していく』ことの重要性を特に若手研究者に感じて頂ければと思っております。来年は日本とオマーンの外交関係樹立40周年ということでオマーンから要人の来日が予想されますので、外務省の協力を頂きつつ要人の方々にも駒場でお話し頂く機会もあるかと思

います。また将来的に、中堅・若手の中東研究者に学内外からお集まり頂きまして、中東地域の民主化とイスラームの関係を考える研究会を組織する可能性もありますが、その場合にはアラブ地域の専門家のみならず、トルコ・イラン・パキスタン・アフガニスタンなどをカバーできる専門家をもお招きし、専門の内容としましても民主化論・イスラーム政治思想史・イスラーム古典理論などもカバーできる多彩な方々に来て頂き、質の高い巨視的な分析を行いまして、『紀要』やシンポジウムなどの形で成果を発信していければ理想的であると考えております。

今お話ししました講演会や研究会を通じまして、中東センターが学内に分散している中東関連の優れた研究成果を結集させ、『東京大学』中東研究の成果としてまとめて対外的に発信する役割も徐々に果たしていくことができれば、海外との学術交流にもさらに役立つのではないかと思います。もともと研究者の交流を主に念頭においてセンターが設立された経緯がござい

ますが、先日私がオマーン大使館を訪れました際に、大使より学生交流(交換留学やインターン)を進めたいというご希望をお聞きいたしました。私は個人的にはこのような交流も大切なのではないかと考えておりましたので、関心をもって前向きに検討したい旨お答えいたしました。駒場でもグローバル30という留学生を受け入れるプログラムが始まりつつありますが、それとも連動させまして、……中東からの留学生を受け入れる窓口としてセンターが役割を果たせればと願っております。……

地道な学術交流としましては、現在、日本におけるオマーン関連文献を網羅的にリストアップする作業をリサーチアシスタントの院生が行っております。その他に……翻訳上の交流(両国の未翻訳の文献の翻訳)や、両国それぞれの分散している文書館に関する情報の整理と情報交換により研究者・学生の調査上の便宜を図ることも今後の課題です。またオマーン政府は東京大学の他にも、ハーバード大学・ジョージタウン大学・ケンブリッジ大学・オックスフォード大学・ライデン大学・北京大学など世界の大学に幅広く寄付金を提供しており、複数の寄付講座を持っております。2年に1度全世界のオマーン寄付講座の長が一堂に会する会議が開かれておりますが、2014年には東京大学でこの会議を開催したいという要望をオマーン側から頂きましたので、今後の検討課題となっております。

最後に……湾岸と日本の学術交流の意義についてお話しさせて頂きたいと思

ハワーリジュ派の流れを汲むイスラームの穏健な一派です。イバード派は8世紀初頭にオマーンに伝来して支配的宗派となり、イバード派諸王朝がつくられるなどイバード派住民を中心として政治が行われてきました。18世紀半ばに成立したブーサイド朝期に、オマーンは本土の他にアフリカ東海岸などを含む海洋帝国に発展します。しかし19世紀半ばになりますとアフリカ東海岸が分離独立し、さらに蒸気船の登場やスエズ運河の開通によって帆船貿易が打撃を受けたという経緯もありまして勢いが衰えました。1919年以降、事実上イギリスの支配下におかれましたが、1970年に現在の国王カーブース・イブン・サイド陛下が即位し、その下で石油収入を用いた開発が進められております。

同じアラブ諸国ではエジプト、シリア、イラク、リビアなどのように共和制をとる国々が程度の差はあれ強権体制の下で市民を抑圧する側面が強かったの対しまして、オマーンやアラブ首長国連邦を含む湾岸諸国は君主制の下で石油収入を国民に分配して生活水準を上げ、基本的な福祉を保障することによって社会の安定に努めてきたという特徴があります。アラブ・イスラエル紛争に対しても比較的穏健で現実的な立場をとってきた経緯があり、激しい国際的対立に関与することが苦手な日本人にとっては友好関係を結びやすい穏健派諸国であるとも言えます。特にオマーンはシンドバッドの冒険で知られる海洋国家であり、常夏の国としても観光客を魅了いたします。また世界の多くの大学に寄付講座を設けていることから分かりますように、学術・文化交流を通じて長期的な友好関係を築くことにも熱心です。日本が石油を確保する上で湾岸諸国が重要であることは言うまでもありませんが、学術・文化・観光やモノの交流などのソフト面での関係強化が相互の理解と友好的な感情を促進し、日本の経済的な安全保障に結局は貢献すると言っても過言ではないと思われます。その意味で・・・PIと東大の資源・エネルギー

関連三センターとの将来的な提携は、学術交流が経済交流にも寄与するという正に典型的な事例になることと存じます。私共の中東センターも、自然な流れとしてオマーンの سلطان・カブース大学と学術交流を深めることと思っておりますし、そのような関係を中東の他の大学とも地道に築いていければと考えております。

私共の中東センターも将来的に・・・PIから留学や研究に來られるアラブ首長国連邦の皆様とも何らかの形でかわりを持つことになるかも知れません。また今回『中東』という共通項でシンポジウムにお招きいただき、工学部系のセンターと、海外との学術交流上の共通点を見出したことも、大変有意義に感じております。学内の・・・文系理系を超えた共同作業は少ないという印象がありますが、実は私が今まで駒場で行って参りました・・・中東近現代史の授業では、将来工学部に進学する理科1類の学生が少なからず履修し、しかも学期末に設けております自主討論にも熱心に参加しているのが実状で、これは当初大変意外で嬉しい驚きでした。今学期の教養学科の授業では中東政治思想史ということで、民主主義・自由・社会的正義・人間の尊厳などに対する伝統的な考え方が中東イスラーム世界と欧米では歴史的にどのように異なってきたか（あるいは共通性がある

るか)、いわば『異文化の政治をどのように理解するか』というテーマを探求しておりますが、シニアの文科系の専門授業としては珍しいことに、履修している35人中理科1類の2年生が4人ほども混じっております。専門分化の時代と言われますが、駒場の学生は本来、文系理系の境界線をたやすく超える知的柔軟性や好奇心を持っている証拠ではないかと思えます。一例にすぎませんが『中東における資源と環境問題』というシンポジウムのテーマを設定したとしますと、理系だけでも、文系だけでも恐らくは完全にはカバーしきれず、理系・文系両方の研究科やセンターの提携によって初めて有意義な成果が得られるように思えます。若い人々の柔軟な知性を刺激し、世界的な視野を持たせるような文系理系の枠組みを超えた提携や共同作業を、海外との学術交流という共通の目標の下に、今後工学部の皆様とも私共のセンターが積極的に行っていければ大変幸いです。・・・本日はありがとうございました。」



エッセイ

英国の湾岸研究と「アラブの春」

山田 真樹夫

オックスフォード大学大学院国際関係論博士課程（湾岸専攻）

英国で中東研究を開始して早三年半が過ぎた。その前にも一年間こちらで勉強したことがあるので滞在の合計は四年以上になる。一般的に米国のアイヴィー・リーグの大学が世界のアカデミアを牽引する印象がある中で、英国の大学はユニークな位置を占めている。それはグローバルなアカデミアのいわば「ハブ」としての機能である。大英帝国の遺産から、国語である英語を世界の共通言語にもち、地理的にも北米大陸とユーラシア大陸の間に位置し（中東にも数時間で到達可能）、大陸ヨーロッパとも目と鼻の先という、中継地点として理想的な条件が整っている。その利便さゆえに英国はグローバルな学会・フォーラムを開催するにはうってつけの場所であり、絶えず世界中からあらゆる研究者が集まり、留まり、そして旅立って行く。逆に言えば、純粋な「国内」学界は英国にはもはや存在しないといっても過言ではなく、学会やシンポジウムに「国際」という形容詞が着くこともほとんどない。国際が標準なのである。大学自体においても、ときに「ウィンブルドン現象」とも呼ばれる多国籍化は相当に進んでおり、例えば、自分を含め十名いる入学年度が同じ同僚の内、英国人学生はゼロである。ある教授は「オックスフォード大学は『英国の大学』ではない。たまたま英国に存在している『世界の大学』である」と公言しており、世界中からあらゆる知を集結することに対する妥協のなさが、今日の英国のアカデミアを支えている。

中東・湾岸研究においては、これにいくつかの特殊事情が加わる。ひとつは、例えばイランなど政治的事情から米国への渡航が困難な国の学者にとって相対的に渡航が容易なことである。また、米国が中東における紛争に最大の当事者として深く関わる一方で、「一歩引いた」やや冷静な視線をもつことができるといふ強みもある。米国ではウォルトとミアシャイマーの著作によって数年前に大きな議論が巻き起こった政治ロビーの存在をそれほど気にせず学術活動ができるという自由さであろう。特に湾岸研究においては、その多くの国家がかつて大英帝国の影響下にあったことから、(サウジアラビアを例外として)米国に比べて研究の歴史が古い。湾岸諸国が再びオイルマネーの恩恵を受け、潤沢な寄付がOECD諸国の学術機関に寄せられる今日では、ダラム大学、エクセター大学といったこれまでの研究の拠点に加え、ケンブリッジ大学(2010年より毎年7月にドバイのシンクタンク Gulf Research Centreの主宰で湾岸研究大会 Gulf Research Meetingを開催)やLSE(2009年より湾岸における開発・統治・グローバル化をテーマとした「クウェート・プログラム」を運営)等に、新たな拠点も続々と誕生している。その周辺を政策決定者や産業とアカデミアをつなぐ多くのシンクタンクが取り巻いているのは言うまでもない。また、出版業界との連携も強く、大手の学術出版社Routledgeからは2011年、湾岸研究に特化したJournal of Arabian

Studiesが創刊された。

このように、世界と、そして中東との強いコネクションをもつ英国であるから、当然それらの地で起こる出来事に対しては敏感に反応する。2011年には「アラブの春」という大変動が中東で起こり、アカデミアにも激震が走った。私の所属するオックスフォード大学や上記の研究拠点でも年頭以来あらゆるシンポジウムやラウンドテーブルが開催され、研究者は情報収集と発信に追われた。騒乱と革命の報を聞いて急遽里帰りしたアラブ人学生や現地帰りの学者、ジャーナリストによる熱のこもった報告も多く聞かれ、各種の情報が飛び交う中で、皆この新しい現象を理解しようと必死であった。チュニジア、エジプト、リビアで起こった革命、そして他のアラブ諸国で今もなお続く政治対決について、私はその専門ではないため、筆を執ることをしない。しかし、この政治変動は(バハレーンを除き)比較的影響の薄かった湾岸諸国を扱うこの業界においても確実に感じ取られた。中東の政変でまず世界が関心をもつのは原油の供給がどうなるのか、という現実的な問題である。イラクが戦禍で輸出を停止し、リビアの政変でヨーロッパへの供給が滞っても、湾岸諸国、特にサウジアラビアの巨大な生産余力がありさえすればその分をカバーすることは可能である。しかし、湾岸諸国そのものが原油の生産・輸出の停止に追い込まれた場合、世界経済は大混乱に陥る、というのが皆の一致した見解であった。世界が固唾を呑んで見守る中、しかし、2011年、政変は湾岸諸国では起こらなかった。この間、私は二度、元サウジ駐英大使・トルキー王子によるサウジ情勢についての講演に接する機会があった。一度

は自身の大学のカレッジにて、もう一度はケンブリッジ大学にて。このように政権の中枢に近い人物をすぐに招聘し、意見を伺うことができるのも英国の大学の強みのひとつであろう。

ちなみに、英国では今回の中東での政変を、グローバル経済が低迷する中における世界大の政治変動の一部、と捉える見方も根強い。それは2011年8月にロンドンで発生した若者による暴動、そして今もなお続くユーロ・ゾーン全体の経済危機など、身近でも目に見える形で危機が発生しているためである。火事は決して地中海という川の対岸で発生しているだけではなく、此岸でも起こっているのである。一時は私の住むオックスフォードの街でも放火・破壊事件が発生し、警察車両・ヘリが街を巡回するなど、緊張が高まった。(私のイラク人の友人などは、バグダードに住む親戚から安否確認の電話を受け取り「いよいよ世界に安全な場所はなくなった」と冗談交じりに呟いたものである。) それはかつて斜陽を迎えた英国の経済が金融の自由化によって回復したものの、その金融が倒れたら次善策が存在せず雇用不安がすぐに高まるといふ厳しい現実の表れでもある。

この点は、湾岸経済にも当てはまる教訓で、オイルマネーを金融や不動産等に還流する経済は莫大な富を生むが、同時に浮き沈みも激しい。人口が急増する中で国民に安定した雇用機会を提供するためには、経済をより多様化する必要がある。「国家産業クラスター開発計画」を整備し、石油・石油化学産業から下流へと製造業の多様化を図るサウジアラビアは、私の研究の焦点であるが、GRMでパネルを共にしたオマーン政府商務省の代表からは、豊か

な自然を生かした観光業や伝統工芸品など他の湾岸諸国には存在しない魅力的な産業の育成についてのアイデアも聞き及び、オマーン経済に個人的に注目している。UAE、カタル、クウェート、バハレーンなど他の湾岸諸国もそれぞれの戦略を生かした多様化に乗り出そうとしている。維持可能な経済を創るための脱石油依存・知識経済への移行が今、声高に叫ばれ始めており、今年は更にそのための知恵が蓄積される年になるだろう。知識経済という点において世界有数の科学技術力をもつ日本の大学は、その有力なパートナーとして信頼を寄せられている。

やや話が脱線したが、最後に、今後の湾岸研究はどこに向かうのか、という問題について考えてみたい。個人的にはキーワードは「多極化」になるのではないかと考えている。世界経済が急速に多極化に向かっていようように、世界のアカデミアも確実に多極化しつつある。近年の英国における研究の進展に触発され、米国でも2011年12月の北米中東学会(MESA)年次大会で「湾岸・アラビア半島研究会」Association of Gulf and Arabian Peninsula Studies が立ち上がり、今後の湾岸研究のかたちを議論する最初の会合がワシントンで開催された。しかし、同時に、これまで英語を国語にもつ英国や米国によって牽引されてきた研究が、世界中で多様な研究拠点が出現することによって次第に相対化されつつある。まずは、長い知の伝統があり、研究能力に優れたヨーロッパ諸国の大学が英語で本格的に発信を始め、大陸的な研究潮流が現れつつある。実際英国にいて感じるのドイツ人のグローバル・アカデミアにおける存在感であり、今や最先端の中東・湾岸研

究はドイツ人研究者抜きには成り立たない。もちろん、南欧、北欧の研究者との交流も日常茶飯事である。一方、GRC(政変の間接的影響で最近ジュネーブに本部を移転したが)に代表されるような湾岸諸国の研究機関の存在感も増すことだろう。そしてシンガポール、中国、インドなどアジアの新興諸国でも中東・湾岸研究は芽生え始めている。韓国、台湾も同様である。

このように百家争鳴の時代に入りつつある世界の湾岸研究の中で、日本の大学・研究機関はどのような地位を占め、また世界に何を発信していくのだろうか。アジアの大学の多くは未だ海外からの技術移転の段階、もしくは海外の知を模倣し、細かな修正を加えるのみの状態に甘んじているところが多い。日本でも、かつては作家・司馬遼太郎が東大を西洋文明の「配電盤」と評したように、大学は欧米の知の取り込み口として主に機能していた。しかし、今や日本には一世紀を超えて蓄積された独自の知の基盤があり、グローバル化が進んだ21世紀においては、それを能動的に世界に発信し、世界の研究潮流を世界の研究機関と共に創っていく立場になったと言えるのではないだろうか。坂本龍馬を育てた幕臣・勝海舟はかつて「国といふものは、独立して、何か卓絶したものがなければならぬ。いくら西洋々々といつても、善い事は採り、その外に何かなければならぬ」と説き、明治日本が西欧列強を真似するだけではなく、芯をもち「卓絶」することの重要性を示した。英国で研究生生活を送り四年、今はこの勝先生の言葉が一番身に沁みる。

新刊紹介

(1)

Christine M. Philliou, *Biography of an Empire: Governing Ottomans in an Age of Revolution*, Berkeley: University of California Press, 2011, xxx, 286 p.

藤波伸嘉 (東京大学大学院総合文化研究科特任助教)

『帝国の伝記』と題する本書は、18世紀末から19世紀半ばにかけ、オスマンが近世帝国から近代帝国へと転身する過程を論じた研究である。その際に切り口として取り上げられるのが、「新ファナリオット」と呼ばれるオスマン帝国治下のギリシア正教徒たちであり、とりわけその中でもこの時期のオスマン政界で重要な役割を担った人物、ステファノス・ヴォゴリディス(1780-1859)の言動である。

第一章では新ファナリオットの活動の前提として、18世紀におけるその先駆者たち、即ち「ファナリオット」たちの興隆とそのオスマン国制における位置付けとが論じられる。続く第二章は1790年代から1820年代にかけてのオスマン内外の激動期を、第三章は1821年のギリシア独立戦争勃発に伴うファナリオット支配の崩壊の諸相を扱う。そして第四章は、ファナリオットとイエニチェリという近世オスマン統治の代表的な行為主体が共に舞台から退場した後の、1820年代後半のオスマン統治の新展開が取り上げられる。ヴォゴリディスら、かつてのファナリオットの序列では二線級だった家系が新ファナリオットとして興隆する契機はこの時期に見出される。ギリシア独立戦争勃発を経た近世オスマン統治の終焉はオスマン政界における正教徒の役割の終焉を意味した訳ではなく、それは、異なる主体により異なる形で再定義されたのだった。それが具体的に示されるのが、ギリシア独立及びエジプト問題を中心とする1830年代の国際関係とオスマン帝国の外交政策、そ

してその中の新ファナリオットの役割とそのオスマン政官界での位置付けとが論じられる第五章である。この間にヴォゴリディスがサモス公に任命されると、この職は、かつてのファナリオットにとっての両ドナウ公(＝ワラキア公及びモルダヴィア公。現在のルーマニア)と同様の、そしてそれに代わる新たな政治資源として、帝国最末期まで新ファナリオットたちに引き継がれることになる。第六章ではクリミア戦争に至るヴォゴリディスの経歴、特に聖地管理権問題における彼の立場が論じられている。

第一章で著者が詳述するように、18世紀におけるファナリオット諸家系の興隆は、両ドナウ公及び御前会議通訳官・艦隊通訳官の四職をオスマン政界における制度的な裏付けとしていた。だが彼らファナリオットの支配は制度的側面には留まらず、ムスリム・非ムスリム双方を巻き込んだ、広汎な非制度的な人間関係や社会関係資本に基づく権力構造に依拠していた。それは、ヨーロッパ領での戦線停滞と徴税請負制の浸透とを背景とする。その意味でファナリオットの政治資源は同時代のムスリム地方名望家やイエニチェリ、同職組合のそれと極めて類似していた。実際、ファナリオットの興隆をもたらした18世紀東欧の正教徒商業網の拡大発展、啓蒙主義の浸透、正教会の集権化、そしてそれらを受けた正教徒の「ギリシア化」とは、オスマン帝国の枠組みを前提とした、その内部での社会的上昇の道でもあったのであり、その意味で一種の「オスマン化」を意味し

てもいた。既存のいわゆる「ミット制」研究が往々にして非ムスリム限定の法制的変遷に関心を集中させがちなことに鑑みれば、このように非ムスリムの視座から、しかしムスリム・非ムスリム双方に関わる形でのオスマン統治の政治的・社会的実態やその変容を再考しようとする本書の議論は貴重である。

ただし、オスマン統治を「ファナリオットのレンズを通して」見るという本書の課題は必ずしも十分に達成されたとは言えないように思われる。マフムト二世期に関する本書のオスマン政治史叙述は、結局のところ従来の、「ファナリオットのレンズ」を通さない叙述と大差がない。それは恐らく、本書の議論が事実上オスマン国政における新ファナリオットの地位の分析に限定されており、正教徒共同体内政治の中での新ファナリオットの位置付けについて踏み込んだ議論を行なえていないことに起因しよう。18世紀末から19世紀初め、ロシアの黒海進出及びナポレオン戦争に伴うフランス海運の撤退という契機を経た正教徒商業網の飛躍的発展、そしてその担い手となった正教徒の銀行家や海運業者たちの顕著な経済的成長という社会的な変容が、当時のオスマン帝国において政治的に如何なる意味を有していたのかという点が、国政の文脈でも共同体内政治の文脈でも、十分に斟酌されていないのは惜しまれる。

とはいえ、トルコ語・ギリシア語の公刊未公刊の史料を駆使した本書が、近世オスマン秩序の崩壊から近代オスマン秩序の形成に至る過程を新たな視座から照らし出した重要な業績であることは疑いない。本書は、多民族多宗教的なオスマン史叙述の方法を考えるに当たり、有益な示唆を与えてくれる著作と言えよう。

(2)

Michael A. Reynolds, *Shattering Empires: The Clash and Collapse of the Ottoman and Russian Empires, 1908–1918*, Cambridge: Cambridge University Press, 2011, xiv, 303 p.

本書は、1908年の青年トルコ革命から第一次世界大戦終結までの期間を対象に、オスマン、ロシアの両帝国の外交政策が如何に連動し如何に相互に反響していたかを、東アナトリアという場に注目して描こうとする。

第一章でバルカン戦争に至る当時の帝国主義的な国際環境全般が提示された上で、第二章及び第三章では、その特殊オスマン的、特殊ロシア的な文脈を、両帝国の外交上の地位や戦略、アルメニア人やクルド人などの東アナトリア現地の政治主体の動向を紹介しながら分析する。第四章は第一次大戦勃発前後、オスマン、ロシア両帝国の政策決定過程とその際の優先順位とを論じ、第五章で、大戦中の東アナトリア情勢に即して、両帝国が如何なる人口工学的かつ戦略的な観点に立脚して、その政策を遂行していたかを考察する。以後、第六章から第八章にかけて、1918年のブレスト＝リトフスク講和からムドロス休戦協定に至る大戦末期の期間について、オスマン帝国の東アナトリア及びカフカース政策を、ドイツ及びソヴィエト・ロシアとの関係を軸に政策論的に論じている。

本書の要点は、研究史上ではしばしば汎トルコ主義、汎イスラーム主義といった文脈で、目的論的かつ非合理的なものとして解釈されがちだったオスマン、ロシア両帝国（特に前者）の東アナトリア政策について、それを帝国

主義時代の国際関係の文脈に置き直し、両国の外交・軍事政策が非合理的な民族主義ではなく、あくまで冷徹な権力政治の観点で構築されていたことを論証するところにある。大戦中のアルメニア人の運命についても、それをそれ単体として見るのではなく、同時代の諸列強に広く浸透していた人口工学的な発想、大戦中のロシア側の同様の政策、そして現地勢力の宗派主義的な相互殺戮の文脈に置いて論じるくんだり是非常に説得力が高い。

このように本書は第一次大戦期における両帝国の外交政策の相互作用を比較考察する優れた研究である。そのことを前提に、本書の達成を受け今後より深化されるべき論点として以下のような点が挙げられよう。まず第一に、本書では些か手薄に見受けられる両帝国の国内政治の動向を掘り下げ、その文脈で両帝国の外交政策を捉え直すことである。実際、本書第六章以降の議論は基本的にオスマン軍を中心に据えた叙述となり、オスマン帝国の文官諸勢力、更にはロシア側の諸行為主体は、ほとんどオスマン軍との関連でしか登場しない。第二に、本書の事実上の終期とされているムドロス休戦協定以降、トルコ独立戦争を経て、トルコ共和国及びソ連邦の成立に至る時期の東アナトリア・カフカース情勢もまた、両国の狭間における政策の相互作用の観点から論じられるべき課題だろう。帝政

崩壊からソ連邦結成までの間に政体も指導層の人的構成も大きく変容したロシア側と、統一派主体の政治指導層の人的構成が概ね引き継がれたまま共和制樹立に至ったオスマン・トルコ側との相違を念頭に置けば、本書で試みられた手法を、時期的により延長して、また対象とする行為主体の範囲を拡大して、大戦前後の連続と差異にも本書の視座を適用していくことで、オスマン・トルコ史のみならず、ソヴィエト・ロシア史やカフカース各国史に対しても貴重な貢献を行なうことができるだろう。

そのような見通しを指し示す本書は、国際関係の場における各国の政策の相互作用、そしてその各国の文脈における内政と外政の相互作用の解明という困難な課題に、露土両国の文書史料の博捜を通じて取り組んだ貴重な業績であり、20世紀初頭のオスマン・ロシア関係やカフカース情勢を考える研究者にとっては逸することのできない著作だと言えよう。

中東地域研究センターの活動から

(1) 出張報告

●山内昌之 UTCMS センター長のオマーン国出張

2011年9月12日から18日まで、本センターの山内昌之教授は、スルタン・カブース・グローバル中東研究寄付講座に関連した講演・調査・打ち合わせのために、オマーン国へ出張しました。渡航中、山内教授は、寄付講座の運営を監督するオマーン国高等教育省のラーウィヤ大臣およびサルミー次官を表敬訪問し、本寄付講座の運営状況と今後の活動を報告しました。そして研究者の相互派遣といった学術交流をはじめとする、学術・高等教育分野における本学とオマーン国との協力について意見を交換しました。



(左からサルミー次官、ラーウィヤ大臣、山内センター長)

またスルタン・カブース大学 (SQU) のピーマニ学長及びモナ学長補佐を表敬訪問し、シンポジウムやセミナーの共同開催、また両大学の学生の相互訪問など、東京大学と SQU 間の学術交流・学生交流の開拓と活性化の方法について意見を交換しました。



(左から森元誠二前日本国特命全権大

使、山内センター長、ピーマニ SQU 学長、モナ学長補佐。)

このほか、山内教授はザワウイ外交担当国王顧問、バドル外務省事務総長を個別に表敬訪問し、本講座の概要を説明し、我が国における中東地域研究の蓄積、中東情勢、二国間関係について意見を交わしました。さらに科学学術振興会にてヒナイ理事長と会談したほか、コンジー会頭はじめオマーン商工会議所を訪問し、我が国における中東地域研究について講演し、企業家らと意見交換をしました。

●長谷川寿一本学総合文化研究科長のオマーン国出張

2011年12月26日から2012年1月2日まで、本学総合文化研究科長の長谷川寿一教授が、オマーン国を訪問しました。渡航期間中、長谷川研究科長はオマーン国高等教育省のサルミー次官を表敬訪問し、本学総合文化研究科・教養学部の概要を説明するとともに、寄付講座の運営状況を報告しました。



(サルミー高等教育省次官に本学の概要を説明する長谷川研究科長。)

また長谷川研究科長は、スルタン・カブース大学のモナ学長補佐、同人文社会学部のムハンマド・バルシー副学長、ならびに科学研究評議会のヒナイ事務局長をそれぞれ訪問し、9月の山内センター長の出張時に議論された

内容を確認するとともに、本学とオマーン国との間での学術交流・学生交流について、実務レベルで話し合いを進めていくことを確認しました。



(スルタン・カブース大学人文学部関係者との意見交換。)

今回の長谷川研究科長の出張には、長谷川眞理子総合研究大学院大学先端科学研究科長、本センターの高橋英海准教授のほか、3名の本学学生が同行しました。学生たちは、スルタン・カブース大学で開講されていた日本語科目受講生と交流の場を持ち、様々なテーマについて意見を交換したほか、首都マスカットおよび内陸部の都市ニズワの宗教施設・歴史的建造物などを視察し、現地の社会・生活についての知見を得ました。参加学生からは、中東に暮らす人々と直接交流することができ、極めて有意義な渡航であったことなどの感想が聞かれました。



(スルタン・カブース大学での学生交流。)

(2) 当センターのロゴマークについて

アラビア語書家の佐川信子先生作成の当センターのロゴマークが出来上がりました。アラビア語のクーフィー・ファーティミー書体で、東京大学中東地域研究センターと書かれています。日本の書道のように、アラビア書道にもさまざまな書体がありますが、クーフィー・ファーティミー書体はデザイン性の高い書体として知られ、書の中に唐草模様を入れることがその特徴となっています。



作成者の佐川信子先生は、和光大学人文学部芸術学科を卒業後、シリアのダマスカスにてシリア人書家ホルミー・ハツバーブ師、ムハンマド・アル=カーディー師らに師事し、アラビア語書道およびイスラーム紋様を学ばれました。1990年代半ばから現在にいたるまで、数多くの作品を制作されています。またアラビア書道やアラブ世界の文化に関する執筆活動もされています。

当センターは今後、今回佐川先生に作成いただいたロゴマークを公的な制作（製作）物（ホームページ、レターヘッド、封筒、名刺、刊行物など）で使用していきます。

来客の紹介

2011年9月27日、久枝譲治オマーン国駐劄特命全権大使が、赴任にあたり来訪されました。



2011年12月22日、印南植（IN Nam-sik）韓国外交通商部外交安保研究院副教授が来訪され、センター関係者と両国における中東研究の現状などについて意見交換をしました。



2012年2月10日、日本オマーン協会の大森敬治理事長、佐藤雅代理事、今泉武久様がセンターを来訪されました。



来年度の活動予定

セミナーのご案内

東京大学中東地域研究センター (UTCMS) 公開講座

中東イスラーム世界セミナー

東京大学駒場キャンパス・18号館4階コラボレーションルーム4 (予定)

2012年度前半期 テーマ

検証:「アラブの春」とその諸相 全6回

- 第1回 (4月20日) オマーン——激動する中東のオアシス——
森元 誠二 (農畜産業振興機構理事、前駐オマーン大使)
- 第2回 (5月11日) サウディアラビア
福田 安志 (ジェットロ・アジア経済研究所研究員)
- 第3回 (5月25日) カダフィの挫折と新生リビアの行方 (仮)
塩尻 宏 (中東調査会常任理事、元駐リビア大使)
- 第4回 (6月1日) イラン
田中 浩一郎 (日本エネルギー経済研究所理事、同中東研究センター長)
- 第5回 (6月8日) 民主化とイスラーム——パキスタンの場合——
山根 聡 (大阪大学言語文化研究科教授)
- 第6回 (7月6日) エジプト
長澤 榮治 (東京大学東洋文化研究所教授)

時間は16:30～18:00を基本としますが、討論者の有無などにより16:00過ぎ～18:00過ぎ頃などに変更する場合があります。詳細はセンターのホームページ (<http://park.itc.u-tokyo.ac.jp/UTCMS/index.html>) でご確認ください。

このセミナーシリーズは研究者のみならず、外交官やジャーナリストなど実務経験者も講師として招いたり参加して頂いたりすることにより、若手研究者が机上の研究を政治外交や社会のリアリティーと常に付き合わせ、乖離していないか検証する刺激的な場を設けることを一つの目的としています。若手の発言を促すリベラルな雰囲気をつくるように努めますので、院生や学部生の皆さんも積極的にご参加下さい。

スタッフ紹介

山内 昌之 (センター長、兼務教授)
森 まり子 (特任准教授)
近藤 洋平 (研究補助員)

高橋 英海 (兼務准教授)
藤波 伸嘉 (特任助教)
安川 悦子 (事務補佐員)

<運営委員>

長澤 榮治 (東京大学東洋文化研究所教授)
石井洋二郎 (東京大学大学院総合文化研究科教授)
矢口 祐人 (東京大学大学院総合文化研究科准教授)

小松 久男 (東京大学大学院人文社会系研究科教授)
杉田 英明 (東京大学大学院総合文化研究科教授)

●発行情報 UTCMS ニューズレター Vol.1 平成24年3月30日発行

発行: 東京大学大学院総合文化研究科グローバル地域研究機構中東地域研究センター (スルタン・カブース・グローバル中東研究寄付講座)
〒153-8902 東京都目黒区駒場3-8-1 TEL 03-5465-7724 FAX 03-5454-6441
<http://park.itc.u-tokyo.ac.jp/UTCMS/index.html>
編集: 森 まり子、藤波 伸嘉、近藤 洋平